

人間・環境学会 第88回研究会

「建築社会学[Architecture-Society Studies]を考える -社会学・心理学・建築学からみた関心と意義-

□日時：2009年3月10日（火）15:00～18:30

□会場：北海道大学東京オフィス

□プログラム

主旨説明：森 傑（北海道大学）

話題提供

岩佐明彦（新潟大学）「効率の最大化が変質させる郊外居住環境」

安藤孝敏（横浜国立大学）「地域課題プロジェクトからみた環境としての「建築」

森反章夫（東京経済大学）「現代版コモンズとエリアマネジメント」

堀雅弘（ウェルメディックプランニング）「実務に役立つ建築社会学とは」（＊欠席）

舟橋國男「コメンテーション」

討論

司会：森 傑（北海道大学）

話題提供者：木多道宏（大阪大学）

まとめ：松原茂樹（大阪大学）

記録：田中康裕（清水建設）

□討論

森：社会的取り組みの価値ということでは、安藤先生のプレゼンは建築の人間にもわかりやすかったです。ただ、今日の発表を、学問としてどのように記述されるのかと思いました。現象として共感できるところがあっても、その記述には差があって、それがハードルになるのではないかと思います。安藤先生、いかがでしょうか。

安藤：私は、自分がしているのが研究なのか実践なのかわかりませんが、心理学の中で同じ分野の人に伝えとしたら、数値的な処理をすることになると思います。ただ、尺度化し、数値化することによって生活の質、well-being、共生の質というものは記述できないのではないかと。これらは質的な、記述的なデータを積み重ね、カテゴライズし、まとめていくことによってしか記述できないと思いますし、そうした研究はたくさんの人に認められるようになってきたと思います。

森：社会的な価値の記述ということでは、心理学をベースとしたものではなく、新たな記述法が必要になるということでしょうか。

安藤：はい。ただし、もちろん心理学はそのベースになると思います。

森：建築では、どうしても次の建物をどうするかに関心が向いてしましますが、岩佐先生が、今後、建築社会学に踏み出すとすればどのような方向性があるとお考えですか。

岩佐：現象についての議論を共有化し、対象化することが必要だと思います。「インドア郊外」という言葉もそのことを意識して使っています。ただ、建築社会学において、今あるものを疑うべきなのか、それとも、今あるものを認めた上で何ができるのかを考えていけばいいのかは悩みどころです。ただ、建築計画のロジックでは対処できない現象が起こっていると思っています。

森：社会学はまさにそれを歴史的にされてきた学問だと思いますが、社会的な価値を議論にあげるうえでの、社会学の価値とは何でしょうか。

森反：建築計画でも都市計画でも、計画学には現状を越えていく、ないものを創るという、超越的な側面があると思います。あるビジョンを制度化する時に社会的な価値が援用されますが、その社会的な価値というのは公的なセクターから降りてきたものであったり、先鋭的な思想から降りてきたものだったりする。そして、それが社会の動態を形成しています。ただし、私としては、ある社会的な価値が、社会的な価値として受け入れられているのは何かということを考えたい。例えば、現在は持続性というテーマがあれば何でもできるような状況ですが、それは持続性というテーマが社会的な価値というテーマとして問題化、収束しているからだと思う。でも、問題化、収束していくところには裂け目があるのではないか、その裂け目を捉えたいと考えています。例えば、延藤安弘先生が「もやい」という言葉を使っておられます。井戸や、人が集まることを住民は「もやい」と表現していることを受け、「もやい」という価値観を提示された。それは決して根拠のない価値観ではなく、消えなかったものを浮かびあがらせるものだったと言えます。

森：建築計画では、1人の設計者がいいと言ったことをそのまま鵜呑みにするのではなく、利用者のニーズを最大限に高めていくようなアプローチが必要ではないかと考えられることが多いように思います。

岩佐：建築の人は、大義名分にするために上手い言葉を作ることがあって、それは、建築家の職能かなと思います。

舟橋：ちょっといいですか。「もやい」の話については、決して物事を動かすためだけでなく、地域の歴史というものを捉えているところに、延藤さんの鋭さがあると思います。配布している資料に書いていますが、鈴木成文さんは、遅れた人々に対して、進んだものを提供するのが建築計画学だと言っている。それに対して、社会学者の上野千鶴子さんは「空間帝国主義者」だと批判されています。森反さんは、以前、鈴木成文さんの考え方でいいじゃないかと言っておられました。それから、進んだ生活というのがあり得るのかというのも問題ですが。

会場：価値が明らかな時は提示するのが容易だと思うのですが、多様化している時代は、何らかの価値観を提示するのは難しいのではないのでしょうか。木多先生が紹介されたユダヤ人の事例も、ユダヤ人が認められるようになったという背景とは切り離せないように思います。

木多：少し話は逸れますが、建築社会学は、みな忘れていたような潜在的な価値を読み取って教えてあげるといのに長けているのかなという気がしました。人類学者のギアツは、調査者が主観を出さないとフィールドからは何も読み取れないということを言っています。

舟橋：先程、西出先生が言われた多様化している時代というのは、これから日本にも色んな人が住むようになるから、文化交流が必要だという趣旨でしょうか。それとも、若い人も高齢者も、どちらを向いているのかがわからなくなっているという意味でしょうか。

会場：後の方です。はっきりした価値がない時代では、平凡な地域では何らかの価値を見出すのが難しいのではないかと思います。

舟橋：そういう時、優れた建築家や研究者が、リーダーシップを発揮する必要があるのかもしれませんが、一方で、発揮させていいのかという疑問もあります。

会場：倫理観とか、宗教とかに近くなっていくのかもしれませんが、どうせ議論がまとまらないと思いますので、別の話を申しあげますが、先程鈴木さんが言われたルームシェアの話では、今はほとんどが海外でルームシェアを経験した人が大家さんになっているようです。閉じた世界で生活しているとなかなか価値観は伝わらないですし、その意味で、価値観を伝えるのは大事なと思いました。

会場：潜在している価値ということですが、障害者の施設を見ていると、一回性、偶有性に満ちているように思います。そしてそれには、建築計画ではなく、価値観や制度、家族構成といったソフトなものが影響を与えている。何の意味もない審議会が多く行なわれていますが、例えば、居住者が居住権を主張したけれど、建築基準法では認められているからということで建物が建ってしまう。先程、user という話がありましたが、日本では *habitant* というのが薄くなっているのではないかと思います。

森：社会的価値という時の、社会の単位を考える必要があるのではないかという気がしています。社会全体という大きな単位でも、1人の研究者がいいと思ったからというのでもなく、中間の単位を考える必要があるのではないかと。

木多：研究者がいいと言ったものが、地域に受けられたものもいい、というのが真実なのかなという気がします。ですから、いくら研究者がいいと言っても、地域に受け入れられなければ仕方がない。岩井洋という方が、過去の記憶も未来も、現在によっていくらでも変えることができる。変えることができるからこそ、それを共有することが大事ではないのかと言っています。少し宗教的になってしまいました。

鈴木：延藤さんの「もやい」について、森反先生も、それから、舟橋先生も、かつてあったものと言われたことが意外でした。その捉え方は危ういのではないのでしょうか。建築家なんて何でも言えると思います。それから、かつてあったものじゃなければいけないのか、ということもあります。西出先生が言われたように、新しく人が入ってきたような地域の場合、過去に何もなくても作っていいものが必要ではないか。ですから、かつてあったものを掬い上げるというのは危ういと思いますし、森反先生がそう言われたのが意外でした。

森反：物と人との関係に対応させる時、何らかの関数系を設定することに、延藤さんは作為を感じておられているのではないかと思います。その作為を縮減させるのが「もやい」ではないかと。新しく作るのもいいけど、一遽に変えるのではなく、連続的に変える必要がある。その時、住民の中に潜在していたものを捉えることで、連続しながら新しいものを作ることができるのかなと考えています。社会学では社会計画論という分野があります。その分野の人に対して、私はいつも、何故そんなことが平然と言えるのかと疑問視しています。私は通りがいい言説が、なぜ通りがいいのかということの問題にしたい。通りが悪い言説というのは、どこかで隘路にはまっている。その隘路を分析することはできるのではないかと思います。たとえば、国分寺の駅ビルでは、夜中になると青少年がやってきてブレイクダンスをしているのですが、警察がやって来ては注意を受けています。その一方で、ホームレスの人が『Big Issue』を売るのは、コンコースから外れた公道なんですね。コンコースに入るのは禁止されているようです。青少年はコンコースにあがれるのに、ホームレスの人はあがれない、このように空間の使われ方が限定されている。コモنز化の実践が行われていない。ですから、そのようにコンコースを清浄化する価値と、そこを横領しようとする実践の対立を分析できないかと考えています。建築は、絶対的なもので、生活を規制する。人々は、それに対してリフォームする力もなく、物的な構造体を受け入れて過ごすしかない。それは権力だと思います。ですから、「空間帝国主義者」という批判があるようですが、「空間帝国主義者」なのは当たり前であって、そこに柔らかなものと、硬いものという幅があり、建築家はその幅の中で苦闘しているのではないかと。延藤先生は、根拠はないけれど説得するという際に、説得に確信を持っておられるんだろうなと思います。

舟橋：以前の建築学会の会長が、建築家は黄表紙なんて読みませんからと発言したことがあるんですね。それに対して、私は、それは建築家の不勉強ではないかとくってかかったことがあります。ただ、今日のお話を聞いていて、私も社会学については不勉強だなと思われました。ただ、それを私どもに求められても困るというのもあります。学部教育は文化を伝えるんだということを言っておられる方がいましたが、まさにその通りだなと思いました。